

第3回 創薬力の向上により国民に最新の医薬品を迅速に届けるための構想会議

日時：令和6年3月7日（木）16：00－17：00

場所：官邸4階 大会議室

- 議事：1. 開会  
2. 参考人プレゼンテーション  
3. 意見交換  
4. 閉会

配布資料：資料1 日本製薬工業協会 上野氏提出資料  
資料2 ファストトラックイニシアティブ 安西氏提出資料  
資料3 ボストンコンサルティンググループ 柳本氏提出資料  
参考資料 これまでの会議における構成員の意見

出席者：村井 英樹 内閣官房副長官  
鴨下 一郎 内閣官房参与  
岩崎 真人 前武田薬品工業株式会社代表取締役  
岩崎 甫 山梨大学副学長・融合研究臨床応用推進センター長  
上原 明 大正製薬株式会社取締役会長  
高橋 政代 株式会社ビジョンケア代表取締役社長  
藤原 康弘 独立行政法人医薬品医療機器総合機構理事長  
牧 兼充 早稲田大学大学院経営管理研究科准教授  
間野 博行 国立研究開発法人国立がん研究センター研究所長  
南 砂 読売新聞東京本社常務取締役調査研究担当  
山崎 史郎 内閣官房全世代型社会保障構築本部総括事務局長  
上野 裕明 日本製薬工業協会会長  
安西 智宏 ファスト・トラック・イニシアティブ代表パートナー  
柳本 岳史 ボストン・コンサルティング・グループマネージング・ディレクター&パートナー

#### ○岩崎（真）構成員

- 日本では、ベンチャーの上場時のバリュエーションが低く、すぐに資金が枯渇してしまう。グローバルな資金の循環が重要であるという観点から、ベンチャーキャピタルの果たす役割は大きく、海外からの資金を呼び込む引き金となる、グローバルで信頼され、活躍できるベンチャーキャピタルを育成するべきではないか。
- 薬を生む、薬を育てる、薬を売るという3つの観点から日本が魅力的であることが重要であり、長期視点で、これらの状況変化を捉えながら、効果的な国のリソース配分、政策実行を行うために、官民で継続的に議論を行う場、いわゆる官民連携協議会、が必要ではないか。

#### ○岩崎（甫）構成員

- 医療分野のアカデミアにおいて、研究に割く時間が少なくなっているという実態があるが、研究者からの有望なシーズも生み出されている。このような日本発の新規性の高いシーズを支援して、ロールモデルとなるケースを創出する仕組みを強化すべきではないか。

#### ○高橋構成員

- 我が国の創薬エコシステム構築にあたっては、日本で閉じないということが極めて重要である。
- シーズを生み出すアカデミアの研究環境の挺入れが必要であり、臨床試験環境と併せて整備を進めるべきではないか。

#### ○藤原構成員

- 海外のエコシステムの強みとして国際共同臨床試験をリードできる病院を有していることが大きい。我が国においても臨床試験実施体制の整備といった実用化に重点を置き、加えて海外のシーズを呼び込むことにも投資をすべきではないか。

#### ○牧構成員

- イノベーション政策を考えるにあたっては、総花的に検討を進めるのではなく、創薬エコシステム全体を考えてどこが一番波及効果が大きいのかという観点から取捨選択をすべきではないか。スタートアップのエグジットのための資金調達できていないことが最大の課題であり、国として臨床試験実施に資する規模の資金提供主体の在り方の検討を進めるべきではないか。
- 世界のエコシステムは同形化しており、「日本型の創薬エコシステム」というものは存在せず、標準化されたものに倣うことが重要なのではないか。
- 日本のスター・サイエンティストの分析をしている限り、まだまだ日本の大学にもシ

ーズがあり、それをチャンスとするべきでないか。一方で、日本のスター・サイエンティストは減少傾向にあり、その対策も必要なのではないか。

- 量子コンピュータの進捗により、再び低分子創薬の研究・開発の重要性が高まる可能性があり、日本のその強みを温存することも必要なのではないか。

#### ○安西参考人

- 我が国の創薬スタートアップの課題として、アカデミア発の技術を創薬へと橋渡しする人材の不足、そしてグローバル展開を先導するアントレプレナーやマネジメント人材の不足があるのではないか。
- 一見オープンに見える海外のエコシステムも、資金調達や最先端の開発・製造といった創薬の重要プロセスは、互いに信頼関係で結ばれたクローズドなネットワークの中で行われており、我が国のエコシステムとの連携と共に、現地での信頼構築が不可欠である。
- 我が国の創薬エコシステム育成には、国内スタートアップがグローバルに挑戦し、海外ネットワークのインサイダーとなるためのアウトバウンド戦略と、海外の投資家やスタートアップ経験者が我が国で活躍するためのインバウンド戦略の、両面から促進をしていくべきではないか。

#### ○上野参考人

- 日本の創薬エコシステムを考える上で、世界につながる・世界から呼び込む・世界に出ていくという視点が重要であり、日本にあるものを示すことがその一助となるのではないか。
- 基礎・応用段階と実用化段階で別々の考え方が必要であり、例えば基礎研究においては多様な視点から幅広い支援を行う一方で、実用化研究においては、産業界の目線に基づいた支援を行うといったことについて、官民で意識の共有を図るべきではないか。
- CMO/CDMOの整備、治験環境の整備、健康医療データの利活用の整備といった創薬の基盤整備においては、国のリーダーシップのもと進めていくことが重要ではないか。

#### ○柳本参考人

- 我が国の製薬企業はグローバルファーマと比べて生産性が低く、M&A等によりバイオベンチャー買収・パイプライン導入の加速はありえる。
- 日本全体の創薬力強化を行わなければ、国内製薬企業の投資能力が高まったとしても、必ずしも日本へ資金の還流はなされないのではないか。
- 成功している各国の創薬エコシステムには、1) 世界的水準のアカデミアの集約、2) 高度な臨床開発を支援する医療機関・制度、3) 豊富なリスクマネー、4) 人材・知見の集積交流コミュニティ、5) 海外リソースの活用の5つの共通項が存在し、我が

国においても領域特化や優秀人材の派遣・招聘といった他国の取る戦略から学ぶべきではないか。

以上